
松尾奈都海シリーズ1 陶芸なんか大嫌い！

悲歌りん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

松尾奈都海シリーズ1 陶芸なんか大嫌い！

【Nコード】

N5604A

【作者名】

悲歌りん

【あらすじ】

三流漫画家アシスタントの松尾奈都海の奮闘記、第一弾。今回は三流漫画家、高藤真琴のストーリーの題材を探しに、陶芸家の元へ。だが、奈都海には、陶芸に苦い過去が……。

前編

2003年2月の終わり。

ここは岡山県の牛窓町の三流マンガ家・高藤真琴の家。

「ああっ、描けな～い！」

「そんなこと言われてもねえ、早く描いてください」

松尾奈都海は真琴の部屋にあるテレビで、中島みゆきの夜会ビデオを見ながら、原稿が描き上がるのを待っていた。

「そんな～ん、描けね～よ！　って、何でウチで中島みゆきのビデオ見るんだよー！　気が散る！」

「はいはい。もう止めるから。でも、早く描いてよね。締め切りが・・・あっ！　歩摘さんに電話しておかなくては。この分と締め切りに間に合わないだろうかなあ」

奈都海は、ビデオを停止してE出版に電話した。そして、真琴の担当の歩摘に電話を繋いでもらった。

「お待たせしました。歩摘です」

「あっ、もしもし、高藤真琴のアシスタントの松尾です。いつも高藤がお世話になってます」

「こちらこそ、お世話になってます。で、今日はどうなさいましたか？」

「実はですね、高藤、原稿をまだ、プロット（下書きのこと）も、描けてないんです」

奈都海は、申し訳なさそうに言った。

「えーっ！　プロットもですかあ？」

「はー・・・。申し訳ありません！　何とか、もう少し待って頂けませんでしょうか？　十日、いや、一週間。一週間だけでも・・・。お願いします！」

電話口で奈都海は必死で頭を下げた。

「うーん。そうね。じゃー、以前に奈都海ちゃんが描き下ろした小説をマコちゃんマンガにしたの、たしかあったでしょう。今回はあれで行きましょう」

「えっ、それでいいんですか!？」

「仕方ないでしょう。あれしかないし……」

「そうですね……。よろしくお願いします。では、失礼致します」

奈都海は、E出版の歩摘との電話を切って、真琴に向かって言った。

「はー、もう数え切れないよ。歩摘さんに謝ったのお」

「ごめんね、なっちゃん。いつも迷惑ばかりかけて」

真琴は、申し訳ないという顔して言った。

「いいってば、あたしは。でも、歩摘さんに申し訳が立たないよお」

「だよね。何か描かなきゃいけない。でも、何も思いつかないよ。」

なっちゃん、助けてよおー、ねえ?」

真琴は、思いつめながら、頭を掻いた。

「仕方ないな。こうなったら、歩摘さんをお願いするしかないか。」

「どんなのが描きたい? やっぱりシリーズ化がいいよね」

真琴は考えながら言った。

「うーん、そうだなあ……。陶芸、うん、陶芸家を目指す少女の

悲しい愛の物語。なんてのはどう?」

「いいんじゃないの。それで」

奈都海は、真琴が原稿を描けるなら何でもいいと思い、適当に返事をした。

そんなこんなで無理矢理スケジュールを割り込ませ、早速編集部との繋がりのある陶芸教室に取材を申し込んだ。

中編（前書き）

「前話までのあらすじ」

三流漫画家アシスタントの松尾奈都海は、漫画の構想がまとまらない三流漫画家、高藤真琴と共に陶芸教室を訪れることに・・・

陶芸教室は、牛窓から邑久に行く途中の山の鹿にあった。回りを山に囲まれており、遠くで微かに車の音が聞こえるのどかな場所だった。

「ええつと、るり工房、るり工房と。歩摘さんにもらったメモによるとこの辺なだけどなあ。あつた？」

「なっちゃん、ここじゃない？」

「ここ、ここ。間違いないよ」

二人は、今日からお世話になる、るり工房に入った。

「ごめんください」

「はい」

奥から、若い男性が出てきた。

「E出版の紹介できました、高藤真琴と松尾奈都海と申します」

「はい、聞いております。どうぞこちらへ」

二人は、工房に案内されてた。部屋に入ると陶芸品や用具がたくさん置いてあった。

「こちらでお待ちになってください。今、先生を呼んでまいりますので」

若い男性は部屋から出ていった。5分後、若い男性はコーヒーを持ってきてくれた。

「コーヒー、どうぞ。先生はもう少しで来られますので」

「ありがとうございます」

その時、ドアが開いて一人の若い美人の女性が入ってきた。その美しい女性を奈都海は何処かで見たとあると思った。

（そつだ、怜香のママにそっくりだ！）

怜香とは、小学六年の夏に東京に転校してしまった、奈都海の親友だ。

「大変お待たせしました。あの、私の顔に何か？」

「あつ、いえ。なんでも。私は松尾奈都海と言います。こっちは高藤真琴です。よろしくお願いします」

「私は、中坂奈緒子と言います。どうぞこちらこそ、よろしく」
「では、僕は失礼します」

「ありがとうございます。あつ、荒伊君、来月の展示会の件で伊勢田さんが打ち合わせしたいって言ってたわよ」

「分かりました。では、失礼します」
そう言って彼は出ていった。

「ごめんなさい。取材内容のほうは、E出版の歩摘さんから聞いております。分からないことがありましたら、なんでも聞いて下さいね」

「はい、どうもありがとうございます」

奈都海は一通り、部屋を見渡して、

「すごい数ですね。全部、奈緒子さんが・・・」

「はい」

奈緒子は恥ずかしげに言った。

真琴は、棚の上にひときわ大切そうに飾ってある陶芸品を見つけた。

「あの、棚の上に飾ってあるのも奈緒子さんがお作りになったのですか？」

「あつ、あれは・・・」

奈緒子は、目を泳がせながら言った。すかさず、奈都海が、

「ごめんなさい。変なこと聞いて。マコ」

「うっうん。奈緒子さん、ごめんなさい」

「いえ」

少しの沈黙が続いた。そして、その沈黙が、先ほどの荒伊という青年によって破られた。

「失礼します。奈緒子さん、電話です」

「ありがとうございます。すいません、ちょっと、失礼します」

そう言って、奈緒子は、部屋を出ていった。

「でも、あの棚のだけ綺麗でうまいね」

真琴は、棚のほうを見て言った。

「うーん。綺麗だね。ちよっとだけ、近くで見てもみようか。勉強にもなるし」

二人は、棚に近づいた。

「なんか、引かれてく・・・」

「ちよっとこれ。マコ、これ見てよ」

奈都海は、そこにあつた陶芸品を入れる木箱の蓋を見た。

「これって、あの有名な藤山神宗一郎の木箱じゃない。ってことは、これは、藤山神宗一郎の作品でことだよな？」

「いやあ、これもだ。奈緒子さんが買ったのかな？ でも、藤山神宗一郎の作品は、値が高いつて聞いたことがあるよ」

「そうだよねえ」

「うーん、でもさあ、さっきの奈緒子さんの反応、何か腑に落ちないだよ。あの口の苦し方とかさあ。どお思う、マコ？」

「何か引つかかるよね、そこんところがさあ」

二人は、考え込んだ。しかし、その時、奈緒子が帰ってきた。

「すみません。お待たせてして・・・」

「どうなさつたんですか？ 少し顔色がおかしいですよ。気分でも悪いんですか？」

「いえ、大丈夫ですから。心配かけてすみません。・・・ええっと、何処まで話しましたかしら」

「いえ、まだ具体的な話しは何も。本当に大丈夫ですか？ 何でしたら出直してきますけど・・・」

奈都海は奈緒子を心配しながら言った。

「大丈夫よ。さあ、始めましょう。まずは、土捻りからね。したことあります？」

「私は初めてです」

真琴は好奇心一杯で答えた。

「私は・・・一度だけ・・・したことが・・・」

「なっちゃん、したことがあるの?」

「中学の時にね・・・」

奈都海は口を濁しながら言った。

「そう、まあいいわ。土捻りからしてみましようか?」

そう言っつて、奈緒子は立ち上がったのはいいが、その場に倒れてしまった。

「奈緒子さん!」

「マコ、誰か呼んで来て!」

「うっうん!」

そう言っつて、真琴は急いで部屋を出た。そして、すぐに真琴は人を連れて帰ってきた。

それから、奈都海達は、奈緒子を布団に寝かせ、るり工房を後にした。

後編

中坂奈緒子が貧血で倒れてから、二週間が過ぎた。牛窓も徐々に春らしくなってきた。

松尾奈都海は高藤真琴と三歳になる甥っ子の松尾昌哉を乗せて、牛窓から邑久に行く途中の山の麓にある、奈緒子が経営する工房、るり工房に向かっていた。

「まーくん、工房の中を走り回っちゃダメよ。分かった？」

奈都海は後部座席のチャイルドシートに座ってる昌哉に言った。

「うん！ なっちゃん、しじょうのほち（地上の星のつもり）かけて！」

「まーくん、なっちゃん、運転中だから、マコちゃんがかけてあげる」

助手席に座る真琴が曲をかけると、昌哉は中島みゆきの声に合わせて歌い出した。

「まーくん、よっぽど地上の星が好きなんだ。これって、なっちゃんの影響？」

気持ち良く歌う昌哉を見て真琴が奈都海に聞いた。

「まっさか。テレビで覚えたんじゃない？ 最近話題だし、うちの連中、プロジェクトX見てるから、それでまーくん、覚えてるんじゃないの」

「ふーん、しかし、よく覚えてるよね」

「そこところは、私も感心してるのよねえ」

「これを機に中島みゆきのファンになったりして」

「有りえるかも」

二人はみゆきソングを歌う昌哉を思い浮かべて大笑いをした。にもかかわらず、後部座席の昌哉は、何食わぬ顔をして、地上の星を歌い続けていた。

「マコ、ごめんね。まーくんも一緒に連れてきちゃって」

笑いを止めて、奈都海が言った。

「いいって、旅館、忙しいんでしょ？」

奈都海の家は代々続く老舗旅館。旅館は上の兄夫婦が継いだので、三人兄弟の末っ子の奈都海は旅館を継がなくていいうえに、大学卒業後の就職もある程度決まっているので、今は自由奔放に暮している。また、下の兄は大阪の会社に就職してお盆と正月にしか帰って来ない。

「忙しいみたいだよ。もうすぐ春休みだから」

「大変だね。 - そうそう、奈緒子さんもう体調大丈夫なのかな？」

「良いみたいよ」

「それは良かった、良かった」

そうこう言ってる間に車はるり工房に着いた。

工房に入ると奈緒子が出迎えてくれた。

「先日はごめんなさいね」

「いえ、とんでもないです。もう、お体のほうは大丈夫なんですか？」

真琴は心配そうに奈緒子を見つめた。

「ええ、もう大丈夫よ」

「それは良かった」

奈都海は胸を撫ぜ下ろした。そして、連れてきた昌哉を奈緒子に紹介し、奈都海達は工房に入った。

「 - 先日にも出来なかったので、今日こそは湯呑みを作りましたよ
うね」

そう奈緒子は言って微笑んだ。

それを聞いて真琴はわくわくした。

「でも、どうしましょう？ 昌哉君の分がないわねえ」

「奈緒子さん、そんな気を使わなくても・・・。それに急だし。ま
ーくんにはあたしの分、使わせますから」

「そう、ごめんなさいね」

奈緒子は申し訳なさそうに言い、昌哉の目の前に置かれた土を子供の手でもこねることの出来る大きさにして、三人のための陶芸教室が始まった。

「- そうそう。昌哉君、粘土を丸めるみたいにしてごらん。上手い上手い」

「まーくん、一人で出来る?」

「うん。一人で出来る」

「- 真琴さん、もう少し力を入れてみるといいわ。パンの生地を作るみたいに」

「奈緒子さん、こ、こんなかんじですか?」

真琴は汗まみれになりながら、土をこねた。

「ちよつと貸してください」

奈緒子はプロの手つきで真琴の土を捻り始めた。真琴はというと奈緒子の土捻り姿に見とれていた。

「こんなもんでいいわ」

「あつありがとうございます」

奈緒子にはっこり笑い、奈都海と昌哉のほうを見た。

「昌哉君、出来たかな? 先生に見せてくれるかな?」

「うん」

「上手くできてるね」

奈緒子はそういいながら、形の崩れた昌哉の土の固まりを整えた。「はい。次はどくろを回して、湯呑みの形にします」

奈緒子は二人に見本を見せた。どくろは何とか三歳の昌哉にでも出来る仕組みになってはいたが、三歳と言う年齢のせいか気を使つて、奈緒子は昌哉に、奈都海に手伝ってもらおうように言った。

「なっちゃん、やろう?」

「うっうん」

奈都海はかなり緊張して、顔は強ばっていた。

「なっちゃん、どうしたの?」

「何でもないよ。マコ、楽しい?」

「楽しい!」

微笑み返す真琴の顔はまるで子供の顔だった。

「まーくん、うちらもやるっか」

楽しそうにする真琴を見て、奈都海も笑顔を取り戻して昌哉の傍に行って言った。

「うん!」

「まーくん、回すよ」

昌哉は土の固まりにそっと手を当てた。その上に奈都海が手を置く。奈都海の手は小刻みに震えていた。

「なっしやん・・・?」

昌哉は振り替えて奈都海の顔を見た。その顔は昌哉も初めて見る恐い顔だった。

「・・・」

奈都海には昌哉の声が耳に入ってなかった。奈都海はあの日から後悔していた。真琴に陶芸のマンガにしたらと勧めたことを……。ただ、あの日の朝のニュース番組で見た、陶芸家の半生にあまりにも感動し、自分が中学2年の時にどくろで目を回し倒れてしまったことも忘れてしまったことを。

「なっしやん・・・?」

昌哉は勇気を出して、もう一度奈都海に声をかけた。

「・・・う、うん? なあに?」

ふと、奈都海は我に返り、昌哉に聞く。

「・・・」

昌哉は何と答えていいか分からなかった。いや、昌哉の脳にはまだ、今見たことを言葉で表現する機能が携わってなかった。

「なっちゃん・・・。まーくん、怯えるよ。そんな顔してたら・・・」

「えっ!」

横目でそっと見ていた真琴は、昌哉が困っているのを見かねて口を開いた。

「目は、土に穴が開くぐらい、一点を見つめてるわ、おまけに額は冷や汗。かなり緊張しているんじゃないの？ 何があったか知らないけど、まーくにそんな顔しちゃ・・・」

真琴には大体検討は付いていた。この前の口の濁し方にせよ、今回のこの顔にせよ、陶芸というものに何らかのトラウマがあることは解かる。しかし、真琴はこの場では聞くのを止そうと思った。ここでその理由を聞けば、奈都海が傷つくと思ったからだ。ましてや、目の前にいる昌哉の前で言えば、奈都海の”叔母”としてのプライドに傷が付くのは目に見えている。

「なっちゃん、肩の力を抜いたら？」

今の真琴はこの言葉しか奈都海に掛けてやることしか出来なかった。

「そうですよ。奈都海さん、肩の力を抜いて、無心になってもらいなさい」

今まで聞いていた奈緒子は、優しく奈都海に助言した。

「無心に・・・なること・・・」

奈都海は目を閉じて、頭の中の邪険を取払い、静かに目を開き、昌哉の手を包む。そして、どくろを回し始める。

それを見ていた真琴も自分の湯呑みを作り始めた。

それから、どれくらい経っただろうか、なんとか苦戦しながらだが、奈都海・昌哉の共作湯呑みと真琴の湯呑みが完成し、三人はサインを書いて湯呑みを釜に入れた。

「湯呑みが出来上がったら、お送りしますね」

「ありがとうございます」

上機嫌の真琴。疲れ気味の奈都海。

「昌哉くん、届くの楽しみにしててね」

「うん」

大喜びの昌哉。

「奈緒子さん、今日はありがとうございました・・・。それでは失

礼します・・・」

奈都海は気の抜けた挨拶をした。

「奈都海さん、今夜はゆっくり休んでくださいね。ではまた」

奈緒子さんは、笑顔で三人を玄関で見送ってくれた。外に出た三人を待っていたのは、

冬の終わりを告げる夕焼け空だった。

真琴は車が我が家にさしかかるのを見て、口を開いた。

「なっちゃん、中学時代に何があったの？」

昌哉は小さな寝息をたて寝ている。

「一特にあたしが来る3年の時まで・・・」

真琴は中学3年の時、牛窓に住む祖父の家に、祖母の死を機に、家族で福岡から引越してきた。

「実は、あたしね、」

奈都梅は中学2年生の時に、どくろで目を回したことを、真琴に話した。

「そうだったんだ・・・でも、今日は目、回さんかったね」

「それもそうだけど・・・でも、もう陶芸はしたくない! ああ、疲れた」

奈都海は首を振ってみせる。そして、

「ところで、原稿のほうはどう? 書けそう?」

と、問いかけた。

「うん。何とかね。今夜は書けそうだよ」

真琴は車を下りて深呼吸を言った。

「そりゃ、よかった・・・じゃ、また明日来るよ。お疲れさん」

「お疲れサン」

奈都海はその後ろ姿を見て微笑み、車をスタートさせた。

後編(後書き)

【地上の星】

作詞作曲唄：中島みゆき 編曲：瀬尾一三

発売元：財団法人ヤマハ音楽振興会

【プロジェクトX】

正式タイトル：「プロジェクトX」挑戦者たち」

番組内容：ドキュメンタリー番組

放送局：NHK

放送日：2000・03・28～2005・12・28

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5604a/>

松尾奈都海シリーズ1 陶芸なんか大嫌い!

2009年2月17日08時08分発行